

---

# 逃走中 ルイン・エスケープ

黒夜風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃走中 ルイン・エスケープ

### 【Nコード】

N5823X

### 【作者名】

黒夜風

### 【あらすじ】

狂気は人の本性を暴く。人は悪。本性は漆黒の悪。殺し合う姿こそ真の姿なのだ。狂乱の果ての破滅。悪は最高の娯楽であるゲームで乱れ、散れ！「ミッション5\*ブルボン 誰かと性行為を行え」

## ルール

### 【ルール】

- 1、追跡者に捕まったり、自分が死亡したらゲームオーバーです。  
ハンター
- 2、与えられたミッションは必ず1時間以内に実行して下さい（一部除く）
- 3、最後まで残れたら賞品を獲得できます。
- 4、途中棄権（自首）はできません。
- 5、1つのステージでのゲーム時間は24時間です。
- 6、ゲームオーバーしたら復活できません。チャンスは1回だけです。
- 7、自分のケータイは必ず所持して下さい。ミッションもそのケータイに送られてきます。

## プロローグ

死にたくない。

まだ生きたい。

生への執着と死への恐怖が逃走者を狂わせてゆく。

ミッション失敗は脱落。脱落は死。

強制参加の闇のゲームが人の本性を暴き晒す。

狂った歯車。

それが更なる狂音を立てて動き始めた ……

### 【体育館ノトワイラル 確認】

……ここは体育館だろうか？ 集められた人々。子供もいれば大人もいる。男性もいれば女性もいた。

「さて、ゲームを始めましょうか」

………!!?!? いきなりどこからか声が聞こえてきた。声色がらして男性だろうか？ それにしてもゲームって一体何なんだ？

「ミッション失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート！」

体育館に響く男の声。その声が聞こえたかと思うと俺の意識は途絶えた。ミッション？ 失敗は脱落？ 脱落は死、だと！？ どうなってんだ……？

## プロローグ（後書き）

### 【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

ミッション1・2\*酒だあ！ by ストイバー

【A棟3F 2-7教室ノトワイラル 確認】

俺が意識を取り戻した所は薄暗い教室だった。窓から見える風景は黒一色。どうなっているんだ？ 俺立ち上って窓を開けようとしたがビクともしない。鍵がかかっているワケじゃないのに。

教室内には30組ほどの椅子と机。全て小学生用ではなくどれも大人が使えるそうなほどの大きさがある。高校生用か？ という事はここは高校なのか？

「あ、あの、君もゲームの参加者？」

「うわアツ！」

突然、後ろから声をかけられた俺は恥ずかしくも大声を上げてしまふ。俺は素早く後ろを向く。薄暗くて見にくかったが短い髪をした女の子が立っていた。俺と同じくらいだろうか？ だとすれば16歳ぐらいか？

「私はミュート。宜しくね」

「お、俺はトワイラルだ。宜しくなミュート」

ミュート、か。暗闇に慣れてきたのか彼女の顔もだんだん分かるようになってきた。彼女、なかなか可愛い顔しているな。

俺がそんな事を思っていると、2人のケータイが一斉に鳴り響いた。2人一緒って珍しいな。そう思いながらケータイを開ける。

『主催者：ミッション1\*ストイバー 酔っぱらいのマネをする』

主催者？ 誰だソイツ？ それにストイバーって誰だ？ 酔っぱらいのマネをする？ どういう事だ？

俺の頭に「？」も文字が大量生産される。分からない事ばかりだ。俺は彼女の方を見る。彼女も首を捻る。恐らく彼女の頭にも「？」の文字が量産されているのかも。量産型？マークだな。……うん、面白い事言った。我ながら。

「ねえ、どうするの？」

「ん、まあ俺らには関係ないだろ。ほっとけ。どうせやってもやんなくても変んねえよ」

「そ、そうだね。どうせ何も起こらないよね」

そんな事を言いながら俺とミユートはその教室を出た。その後は雑談に雑談。不安をかき消すようにしゃべり続けた。この時、既に頭からミッション1の事は消えていた。

【A棟4F 1-3教室/ストイバー 確認】

ミッション1は私に下された。内容は“酔っぱらいのマネをしる”。……内容はどうってことないが、“ミッション1”という事は2や3があるのか？

暗い教室。私はイスに座って考える。……っと、考える前に一応遂行しとくか。ミッション失敗でメンドーな事になるのはゴメンだし。

「酒だあ！ 酒を持ってこいッ！」

そう言いながら私は近くのイスを蹴っ飛ばす。イスは机に当たり、音を立ててその場に倒れる。うわ、酒乱だな。酒に酔って暴れる人



だな。

その瞬間、この教室の静寂が破られ、私のケータイの着信音が鳴り響く。誰だろな？ こんな時にメールしてくるのは。出会い系サイトの勧誘メールじゃないといいケド。私は中年デブやヤリチンに体を提供する気はないんで……

『主催者：ミッション1 成功』

マジか。アレで成功なのかい。……って言うか主催者は見てたのかよ！ うわー、恥ずかしいな。私のイメージ崩れそうだ。ま、別にいいケドな。

その瞬間、教室の扉が開かれる。私は驚いてそっちに目をやる。……暗くて見にくいケド、入ってきたのは女の子だった。

「だ、誰だ？ お前は？」

「……私は、私はレストル」

レストルと名乗る女の子はゆっくりと私に近づいてくる。な、何の用だ？ メアド交換しましょう、なんて言われてもしないぞ？ ……ていう雰囲気でもないか。

「ねえ、その、早く楽になった方がいいよ」

「は？」

「今は簡単なミッションだけど……いずれ、手に負えないミッションがやって来る。実行すら難しいミッションがやってくるの」

実行すら難しいミッション？ 難易度UPってヤツか。手に負えないってのが気になるな。その時、私のケータイと彼女のケータイがなる。同時か。偶然ってヤツだな。その瞬間、彼女はとんでもない言葉を発した！

「死んだ方がいい」

「は？ はあ!？」

「来るの！ 主催者が送って来るの！ 絶対に、絶対に今死んだ方がいい！ まだ楽な内に！」

ちよ、何言つて……！

「一度“参加者”になったらもう誰も逃げられない！ “みんな、死んだ”」

みんな、死んだ……？ な、に？ どういう事？

私の心臓が今までにないほどバクバクする。もし、危険察知センサーがあつたらきつと激しく反応しているだろう。コイツ、頭がヤバい。何を言っているんだ、コイツは！

「ミッション成功はその場しのぎでしかないの……」

「あ、あの、どうでもいいケド、さっき届いたメールを確認させてくれないかな？」

私は別にメールを見たかったワケじゃない。本当はこの子とこれ以上、話したくなかったただけだった。このヤバい事を言いまくってる子と。

『主催者：ミッション2\*テレジア 誰かに「大好きです」と言っ

愛の告白をしるつてヤツか。ミッション1より少し難易度が上がったか？ いや、そんなに変わりはないかもしれないケド。

その時、私の近くですすり泣き始めた。言うまでもなくレストル、が。どうした？ 私が泣かせたのか？ いや、んなハズないか。

「……このミッションで私は彼と出会い、仲間になった。でもそのせいで彼は死んだ。私の為に彼は、彼は……！」

そう言うのと彼女はケータイを握りしめてその場に座り込む。

いや、待て。待て待てマテマテ。おかしいでしょ。「このミッションで」ってこのミッション2は今来たばかりじゃん。「彼と出会い」って私は女だし、死んでもないぞ。勝手に殺すなよ。私は後80年は生きるぞ。

その時、教室の扉が開かれ、別の女性が入ってきた。ピンクの髪に短い髪の毛。年齢は10代後半、か？

「あ、どーも」

「お、おお、何だ、お前は？」

私がそう言った途端、彼女は叫んだ。

「“大好きです”！」

「……ん？ん？」

やべえな。なんだ、コイツは。頭のヤバい子の次はレズな女の子か。

……私の前に レズが 現れた

ミッション1・2\*酒だあ！ b y ストイバー（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

## ミッション3・4\*女の子の胸を揉め

【A棟3F 廊下ノトワイラル 確認】

『主催者：ミッション2 成功』

俺はケータイを閉じる。2-7教室で出会ったミユートはスマートフォンをしまう。いいなあ、俺もスマートフォンにしようかなあ。最近、色持つてる人、増えてきたしな。

……それよりもこのゲームっていつ終わるんだろ？ なんか、面白くねえな。酔っぱらいのマネさせたり「大好きです」って言わせたり、何がしたいんだ？ 主催者は。

「ねえ、パチンコの玉ってあるじゃん。アレってさ“鉄”で出来て  
いるんだよ」

「あー、そうなの？」

お前はパチンコ行ったのか？ つか、何歳だ、お前は。

「ホラ、“金を失う”と書いて鉄。パチンコの玉も鉄。つまり、パチンコするとお金を失うって事なんだよ」

ミユートがニコニコしながら言う。なかなか上手い事言うな。コイツは。俺がそう思っていると再びケータイが鳴る。俺のと彼女の。クソ、また主催者からのメールか。

『主催者：ミッション3\*ビザンツ A棟からB棟へ移動しろ。2Fに渡り廊下がある。そこからB棟に向かうといいだろう。ちなみに普通の教室があるのはA棟である』

はあ…… もう、ワケ分かんねえな。今度は移動しろ、かよ。しかもアドバースつきとはな。……ん？ B棟に移動しろ？ という事はA棟とB棟があるのか？

「B棟があるなんて知らなかったね。普通の教室があるのはA棟つて事は今、私たちがいるのはA棟なんだね」

「あ、ああ、そういう事になるな。B棟には調理室とか美術室とかがあるんだろうな」

俺がそう言っていると前方から誰かが走って来た。ネクタイを締め、きつちりとした服装。サラリーマン風の若い男だった。もしかして、ミッシェン3のビザンツか？

「あ、すいません」

「ん、どうしました？」

近くで顔を見て分かったが彼は少し長い髪にメガネをかけていた。遠くからだと細かい所まで見えないもんだな。

「もしかして、アナタがビザンツさんですか？」

「ええ、そうですよ。ミッシェン3を受けちゃったのでね、これからB棟に行くてるよ。じゃ、またどこかでね」

それだけ言うと彼は再び走り出し、近くの階段を降りて行った。ミッシェン遂行は一時間以内だからそんなに急ぐ必要もないだろうに。まあ、早く終わらせた方がいいケド。

「あのビザンツって人、少しカッコいいね」

「え？ そう？ 普通って感じだけだな」

「それよりもこのミッションのおかげでA棟とB棟があつて渡り廊下は2階にあるって事が分かったね」

確かにそうだな。俺も今までA、Bの二つの棟があるなんて知らなかった。もちろん、渡り廊下がある事も。それが2階にある事も……もしかしてこのミッション3の狙いは俺たち全員にこの事を分からせる為のミッションだったのか？ 主催者の狙いはこれなのだろうか？

俺が色々、考えているとケータイが鳴った。

『主催者：ミッション3 成功』

……という事はビザンツさんがB棟に到着したという事か。結構走るの早いんだな。元々は陸上部かサッカー部かに所属していたのか？ まあ、俺にとってはどうでもいい事だけど。

【B棟2F 廊下ノビザンツ 確認】

ミッション成功、か。でも不思議だな。何で僕がB棟に来た事が分かったんだろ？ 主催者はどうやって僕の位置を知ったんだ？もしかしてGPSかな？

まあ、それよりももっと不思議なのは“なんで僕ら全員のメールアドレスを知っている”んだろうね？ いつの間に主催者は僕らのメールアドレスを知ったんだろ？

そう思っていると真つ暗で静かで物音が全くしなかった空間の静寂が破られた。僕のスマートフォン音によって。

『主催者：ミッション4\*ハプスブルク 女の子の胸を揉む』

【A棟3F 廊下/トワイラル 確認】

お、女の子の胸を揉む！？ どんなミッションなんだ！ ちょっとぶざけ過ぎていないか？ …… も、揉んではみたいけど。

「揉まれる子、可哀想だよ。変なミッションだね」

「うん、全くだな。ハプスブルクってヤツは男なのか？ それとも女か？ 年齢は？」

「うーん、あの体育館で見た感じ、男女比は同じくらいだったけど、若い人が多かったかな？」

あの状況でよくそこまで見ていたな。俺は半分混乱していたよ。その冷静な頭も欲しいわ。

「ねえ、どうでもいいけど、私、喉乾いた」

「いや、どうでもよすぎるだろ。それより、今はミッション4だ」  
「えー、関係ないって私たちには」

そう言つとミュートは先に歩き出す。お前も一応、“女の子”なだけでどな。そう心の中で呟きながら俺は彼女の後に続いた。

【A棟2F 進路指導室/トワイラル 確認】

A棟2階の渡り廊下のすぐ近くにあった進路指導室という部屋。俺とミュートはここに来た。彼女が「ここならありそう！」って言ったからだ。

「はい、トワイラルの分！」



そう言ってミュートはコップにお茶を注ぎ、俺に渡して来る。まさか、本当にお茶があるなんて……

俺は近くのイスに座り、お茶を飲む。少し濃い緑茶か？ まあ、別に飲めない事はないんだが。

「あゝ、おいしいね」

「そうか？ 俺はコーラとかサイダーの方がよかったけどな」

「えー？ 炭酸っておいしい？ 私、炭酸系のジュースって苦手なんだよね」

炭酸苦手ってマジかよ。俺は炭酸好きだけどな。

俺が残りのお茶を飲もうとした時、ケータイが鳴った。2人のケータイが。これはメールの着信音だ。2人同時に。という事は主催者からの……メール！？ ミッション5？ いや、違う。だとしたら……ミッション4の成功、メール！？

そんな！ ハプスブルクはミッション4を、女の子の胸を揉むというミッションを！ 成功、させた……！？

『主催者：ミッション4 成功』

そんなバカな！ なんでこんなクソミッションを実行したんだ！？ どうやって！？ 近くの子を襲ったのか！？ 無理やり、実行したのか！？

俺のケータイを持つ手は微妙に震えていた。なんで、実行したんだ……！

そして、ケータイがメール着信を知らせる音と共に激しく振動した！ 主催者からのメールだ……！

ミッション3・4\*女の子の胸を揉め(後書き)

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

## ミッション5・6\*誰かと性行為をしる

【A棟2F 進路指導室ノトワイラル 確認】

『主催者：ミッション5\*ブルボン 誰かと性行為を行え』

クソツ！ ふざけんな！ こんなミッション、するワケねえだろ  
おが！！

俺はケータイを握りしめる手に思わず力が入る。その掌には汗が  
滲んでいた。

「酷い！ ミッション4、5つてイタズラが過ぎてるよ！」

「全くだ！ 主催者の野郎、ふざけやがって。いい加減、ムカつい  
てきたぞ！」

その時、2人のケータイが鳴り響いた。誰だ！ こんな時にメー  
ルしてきやがった……いや、2人同時？ という事はまさか、主催  
者からの、メール？ あ、ありえねえだろ。あのミッション5が実  
行されたのか？ そんな事、絶対にならない、だろ……？

俺はガクガクする腕と手でケータイを操作し、メールを開いた。

『主催者：ミッション5 成功』

だああああ！！ もうワケ分かんねえ！ マジどうなってんだ！  
ぜってえおかしいだろ！ 主催者の野郎、ウソメール送ってんじ  
やねえのか！！

「ねえ、私に、こんなメール、来たらどうしよ……？」

「そんなミッション無視ってやれ！」

俺はそれだけ言い放つと机を思いつき叩く。マジで意味わかんねえ。この大会だかゲームだか知らねえもの、いつの間に俺は参加になったんだ！ いつになったら終わるんだ！

その時、再びケータイが振動し、鳴った。俺のと、ミュートのが。また主催者からの…… もう、イヤだ！

『主催者：ミッション6\*ロマノフ 誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい』

今度は、普通のミッションか。クツ、ロマノフってヤツが変な事、考えないといいけどな。……ん？ 待てよ。「誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい」？

そつだ、そつだ！ やつた、やつたぞ！ このミッションを使えばこの意味不明な大会を終わらせるじゃないか！

「ど、どうしたの？」

「いい事を思いついたんだ！」

「いい事？ なに？」

「主催者にミッションを下すんだよ！ 今すぐ、この大会をやめろつてな！」

「あ、そつだ！ それだよ！ それいいね！」

これでこのワケ分かんない大会を終わらせる。この大会をぶっ潰し、主催者を殴り倒してやる。

今まで暗く、沈んでいたミュートの表情がパツと明るくなる。彼女の顔に笑顔が戻ってきた。俺の心にも光が戻ってきた感じがした。

私は色々と迷っていた。

「で、出来るワケ、ないじゃん……」

私の弟がそう言いながらガクガクと震える。私はミッション4のハプスブルクはさておき、ミッション5のブルボンに“罰”を与えるつもりだった。

ブルボンの受けたミッションは「誰かと性行為をする」だった。私はブルボンが誰かを犯したと思っていた。ワケの分からないミッションを自分が大切が故に実行した。他人を犠牲にしてまで。

でも、弟は言った。ブルボンが女性だったら？ なるほど、そういう考えもあるか。女性が男性を犯した。そういう考えは私にはなかった。

「ブルボンが例え、男性だとしても“死ぬ”っていうミッションを与えるなんて……」

「じゃあ、どうする？ “ロマノフ”」

「ミッション6\*誰かにミッションを下せ。内容は何でもよい」。今までのミッションの中で一番簡単なような気もするこのミッション。誰かに簡単なミッションを与えるだけでもいいし、ミッションに便乗して誰かを殺す事も可能だ。

「あ、アレ？ 姉さん、あっちから誰か来るよ？」

「え？」

私はロマノフが指差す方向を見る。2人の男女が走って来る。どちらも若い人だ。もしかして、私と同じ10代の学生だろうか？

「あ、ちょっといいですか？」

「え？ 何？ アナタ達は？」

「俺はトワイラルっていうヤツだ。今、ロマノフってヤツを探しているんだけど……」

ロマノフを探している？ つまり、私の弟を探している？ どういう事だ？

「な、なんで探している？」

「私たちはそのロマノフっていう人にミッションを下して貰いたいの。主催者に向けて「今すぐこの大会を終わらせる」ってね」

なるほど！ このミッション6を利用してこの大会（？）を終わらせるのか！ それはいい考えだ。

私は弟の方を見ると無言で、少し微笑んで頷く。

「分かったよ。姉さん」

「え？ お前がロマノフなのか？」

「……うん。そうだよ、僕がロマノフだよ」

「そうだったのか。じゃ、頼むよ！」

「任せて！ 主催者、この大会を終わらせるオ……！」

弟は大きな声で暗い廊下に向かって叫んだ。その声は暗闇へと消えていった。……これでいいのか？ いや、いいんだよな。一応、ミッションは下したんだし。

「ありがとな、ロマノフ！ これでこの大会はおしまいだ」

「え、あ、うん、そうだね」

「これで主催者も終わらせざる得ないよ。だって“ミッション失敗は脱落”だからね」

私はあの体育館で少しパニックに陥っていた。だからあの時、主催者の言った言葉はこの程度しか覚えていない。ミッション失敗は脱落。脱落は……この先は忘れた。

主催者がミッションに従っても失敗してもこの大会は終わりだ。主催者が脱落していなくなったらきつと大会そのものが成り立たないからな。

私はもう一度、廊下の先を見る。真つ暗な闇。それだけがそこにあつた。……なぜか分からないケド、なんか不安になる。何か忘れていているような気がするのは私だけ……？

ミッション5・6\*誰かと性行為をしる(後書き)

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名



## ミッション6\*ミッション失敗は脱落 脱落は死

【A棟1F 廊下ノトワイラル 確認】

ロマノフが主催者にミッションを下してからそろそろ1時間だ。俺の記憶が正しければ確かミッションは1時間以内に実行しなければならぬ。

主催者はこのミッションにどう立ち向かうのか。実行すれば大会は終わり。脱落しても主催者不在で大会は終わり。どうなるうとも大会は終わりだ。

「ねえ、さっき電話してきた“レストル”って友達？」

「いや、俺は知らねえけどな。ミュート、お前は？」

「私も知らないよ。レストルなんて子」

つい10分ほど前、レストルと名乗る女性がロマノフのケータイに電話をしてきた。内容はミッションはどうしたのか？ という内容だった。

ロマノフは「主催者に大会を終わらせろってミッションにした」と答えた。しばらくそのレストルってヤツは黙っていたが、「大会が終わるって信じてる」とだけ言って電話を切った。

アイツ、何で電話してきたんだ？ 何かあるのか？ 俺には予測がつかない。一体、なんで電話してきたんだ……？

その時、俺のケータイ、いや、全員のケータイが鳴った。という事は主催者からのメールだ！

「いいか？ 見るぞ？」

ロマノフ、プロイセン、ミュートの顔を見ながら俺は言った。こ

のメールに大会の運命が書かれているハズだ。続くのか、終わるのか。いや、どうやっても終わる。

主催者が実行しようが、失敗しようが絶対に終わるハズだ。俺はそう思いながらケータイを開け、メールを確認した。

『主催者：ミッション6 失敗』

は？　なんで、だ？　ミッション6失敗って……？

『ロマノフはミッション失敗により脱落とする』

俺の頭の思考が停止した。意味が分からなかった。どうなっているのか全然理解できなかった。なんでロマノフがミッション失敗なんだ？

俺はロマノフを見る。彼はケータイを持ったまま、まばたきもせずに口を僅かに開け、画面を見つめていた。

彼は確かに「主催者」に「大会をやめろ」というミッションを下したハズだった。

「な、なんで！？　なんで！？　僕はミッション6をやったよ！！？」

その時、俺の頭にとある文字が浮かび上がった。「ミッション成功」

ミッション1から5まで全て主催者から「ミッション成功メール」が届いていた。では今回は？　今回のミッション6では届いたか？

否。『ミッション6 成功』なんてメールは見えていない。

クッ！　なんで気がつかなかった！　ロマノフが叫んだ後、ミッションを実行した後、「ミッション成功メール」が届かなかったのになぜ気がつかなかった！？

「うわ、わぁ！ 僕はどうなっ……………」

ロマノフが何かを言いかけた瞬間だった。空気を裂くような轟音と共に彼の上半身が爆発したのは……………！

熱風が俺達の体に強く当たり、その衝撃でその場に倒れる。彼の周囲には熱された血と肉片が飛び散り、背筋が凍りつくような光景を作り出す。血と肉片で水玉模様が辺り一帯に描かれた。

「う、うわぁ！」

「イヤあッ！」

悲鳴を上げるミュートとプロイセン。彼女達は服にへばりついた血と肉片を手で慌てて払いのける。

一方、上半身の消えたロマノフはその場で、崩れるように倒れ、辺りに血をまき散らす。その体からは僅かに白い煙が上がり、辺りに強烈な異臭を放つ。

爆死。それがミッション失敗者の末路……………！ ミッション失敗は脱落。脱落は……………死！？

ふと、俺の脳裏にあの体育館での放送が蘇る。「ミッション失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート！」

「脱落は、死だった……………」

俺の口からポロリと出たその言葉。ミュートとプロイセンは座ったまま、ガクガクと震えながらロマノフを死体を眺めていた……………

しばらくその場から動けず、ぼう然としてしていると3人のケータイが鳴り響いた。誰も確認しようとしめない。俺だけが震える手でケータイを開け、メールを確認した。主催者からだった。

『主催者：私は「主催者」という名前ではない。私にミッションを下したければ私の本名を知れ』

そして、もう一件のメール……

『主催者：破滅へのカウントダウンはもう始まっている。お前達は私の駒でしかない。少しでも長く生きたければ本性を晒せ。理性を捨てる。他人を犠牲にし、自分だけが生き残る事だけを考えよ。』

一部の者達は分かっているようだが、最初にも言った通り、ミッション失敗は脱落。脱落は死、である。ミッション6失敗者のロマノフには爆死してもらった』

ロマノフの爆死…… やっぱ主催者の仕業かッ！ クソ！ なんてヤツだ！ 「ロマノフには爆死してもらった」その文章の下にはミッション7が記載されていた！ ……これは絶対に死者が出る最低なミッションだった……！

破滅へのカウントダウン…… 俺達は他人を犠牲にしないと死ぬのか？ もし、主催者が他人を殺せ、というミッションを下したら俺達は殺し合いをしなけりゃいけないのか……？

ミッション6\*ミッション失敗は脱落。脱落は死（後書き）

【現在情報】

逃走者：49名

脱落者：1名

ミッション7\*2人で1つの物を奪い合え……？

【B棟4F 廊下/サトラップ 確認】

次は俺か！ だりイけどミッションやんねーと爆死なんだろ！？  
だったらやるしかなねーな！ 絶対に俺はミッションを成功してやる！ こんなんで死んでたまるかよ！！

『ミッション7\*バビロン サトラップ 「目」を手に入れる。ただし、「目の模型」はこの建物には1個しかない。今から1時間後に「目」を持っていなかった方には死を与える。なお、1時間後にどちらも「目」を持っていなかった場合、両方に死を与える』

【A棟3F 2-1教室/バビロン 確認】

私とサトラップの戦い…… 目の模型が1個しかないのなら当然、取り合いになる。殺し合い、なんだな。破滅へのカウントダウンなんだ。……私は死なない。絶対に目を手に入れる！ 例え、相手を殺してでも！！

「ふ、ふふ、ははは！ 目の模型…… それが私の命の鍵だッ！」

私は扉を勢いよく開ける。開けた先の廊下には1人の男性が立っていた。彼は私を見るとぎょっとしたような表情を浮かべる。すまんな。ビビらせて。でも私には時間がない。早く、早く、サトラップよりも「目の模型」を手に入れなければ！ 私は絶対に生き残る！！

【A棟1F 廊下ノ

『ロマノフ 確認

ミッション6失敗：死亡

変異開始 ハンター起動中 残り4分12秒』

木端微塵になったロマノフの上半身。辺り一帯に飛び散った肉片とおびただしい血。彼はミッション6に失敗し、脱落した。爆死という形で。

だが、彼は“再び動き出す”。飛び散った肉片や腕などが動き出し、それらは集まる。残った彼の下半身に集まってくる。

集まった肉体は細胞分裂を急速に繰り返し、次第に元の形に戻っていく。再び人型に戻っていく。

『ハンター起動中 残り2分17秒』

だが、新たに再生した部位は真っ赤な、まるで皮膚を剥いだような感じであった。それに所々がゴツゴツし、元のロマノフとは異なった状態だった。

人型に戻ったそれは立ち上がり、動き始める。全ての逃走者に課せられる新たな試練の誕生であった。

『“ハンター 起動”』

【B棟1F 美術室ノトワイラル 確認】

ロマノフは死んだ。誰かにミッションを下せ。彼はその簡単なミッションで死んでしまった。俺の提案を受け入れ、実行して死んで

しまった。俺が殺したのか？ 間接的に、だが。

彼の姉、プロイセンは今、俺の横の椅子に座っている。その顔に  
生気はない。弟を失った悲しみ。大切な家族を失った悲しみ。さっ  
きまで一緒にいた大切な人を失った悲しみ。それがひしひしと伝わ  
ってくる。

「ねえ…… 私もいつか、死んじゃうのかなあ？」

「わかんねえよ。でもミッションに失敗したら……」

ミッション失敗は脱落。脱落は死。爆死という形で死を迎えさせ  
られる。強制的に、本人がどれだけ嫌がっても、どれだけ生きてが  
つても死ななければならぬ。

俺は初めて人の死を見た。死がやってきた時、その人の人生は終  
わる。これまで頑張って生きてきたもの全てが消えてしまう。

このゲームはいつまで続くんだ？ もしかして、全員が死ぬまで  
続くのか？ そして、今回のミッションでも誰かが死ぬのか……？

### 【B棟3F 生物室/サトラップ 確認】

俺は目の模型を確かに握る。丸い球体を確かに握った。これで俺  
はミッション完了だ。死は免れたようだ。厳密には“まだ”なん  
だけどな。後、ミッション時間は10分程度。残り10分、これを  
守り抜けば俺は死ななくて済む。

俺が生物室の出入り口に行こうとした時、その扉が勢いよく開か  
れた。勢いよく扉を開け、入ってきたのは1人の女性だった。

「……………！ お前、それは！」

入ってきた女は悔しそうな目を俺に向ける。ああ、そうか。この



女がバビロンか。つまり、俺と同じミッション7を下された人間。

「わ、私は、死なない！　こんな所で意味もなく、意味もなく、殺されるかッ！」

そういつとバビロンは近くの椅子の脚を掴み、持ち上げる。俺から奪う気か。そうはさせねえよ！　俺も命かかってんだよ！

俺は持ってきていたバットを持ち、女がイスを投げる前にバットを投げてやった。グルグルと素早く回転しながらそれは女の顔に直撃する。

「う、あッ……！！」

バビロンはその場に倒れる。椅子が激しい音を立てて落ちる。バットはその女のすぐ近くに金属音を立てて落ちる。

俺は素早く女の近くに落ちたバットを拾い上げる。バットの冷たく、硬い感触が俺の肌に伝わる。……殺せ。殺せ！　生かしておくのは俺が危険だ！　殺せえッ！！

空気を裂き、一気に振り下ろす。硬いモノに向かって俺は手に持つバットを振り下ろす。硬いモノにバットが当たると同時に悲鳴が上がる。

「や、めえ！　が、はッ！　も、もう、止め、て！　いた、いッ！」

構うな！　始末しろ！　俺の命を脅かす存在だ！　緊急事態だ！　殺してしまえ！　徹底的に、徹底的に！

「や、め……！！　許し……！！！！」

もっと、もっと強く、何度も叩け！　もっと、何度も！　殺れ！

\*

俺は息を荒げ、近くにあった椅子に座る。生物室には鉄の二オイが充満していた。俺の服は大量の返り血で埋まっていた。

俺のケータイとバビロンのケータイが鳴る。俺の成功メール……  
だな。

『主催者：ミッション7 バビロン サトラップ 成功』

成功……？ 俺とバビロンが成功？ 何でだ？ 「目の模型」を手に入れたのは俺で確か、「目の模型」は1個しかないんじゃないのか……？

俺がそう思っていると、俺のまるで疑問に応えるようにメールが送られてきた。

『主催者：「目の模型」は確かに1個しかない。ただ、私は「目の模型」を手に入れると言っていない。「目」を持っていなかった方に死を与えると言ったが。「目」は既に全ての逃走者が持っているハズだ』

『主催者：バビロン 死亡』

俺は何となくメールの内容を理解したような気がした。何もしなければ、誰も死ななくて済んだのか……

真っ暗な生物室には俺と死んだバビロンだけがいた。

ミッション7\*2人で1つの物を奪い合え……？（後書き）

【現在情報】

逃走者：48名

脱落者：2名

## ミッション8\*200枚目の死

【A棟4F 1-7教室ノトワイラル 確認】

最低だ…… ミッション7は人の恐怖を利用した最低なミッションだった。あのミッションのせいでまた人が死んだ。そして、ミッションはまだ続く……

『主催者：ミッション8\*逃走者全員 職員室に200枚の紙を置いた。全員、1〜5枚まで紙を取れ。ただし、200枚目の紙を引いた逃走者には死を与える。尚、200枚目を誰も引かなかった場合、全員に死を与える 一度引き終わったら再度引くことは不可能。よく考えて引くんだな』

【A棟2F 職員室ノレパント 確認】

今度は間違いなく誰かが死ぬんだね。アタシはまだ死にたくない。やりたい事まだいっぱいあるしね。だから、アタシは真っ先にこの職員室に乗り込んだ。幸い、アタシが一番だった。だからここで引けば絶対死ぬ事はない。

さて、何枚引こうかな……？ 一度、引けば再度引く事は不可能。つまり、48人目になった時に残り195枚以上しておかないと全員が死ぬ事になる。

「……よ、よし！」

1、2、3、4、5！ アタシは机の上にポツンと置かれていた紙の束から一気に5枚引く。これで残り195枚になった。アタシ

が5枚引いてから少しの間を置いて、メールが来た。

『主催者：レパント 終了/残り195枚/残り47名』

「へへっ！ じゃ、次はオラツチの番だな！」

アタシを押しつけ、赤髪の男の子が紙の束に手をかける。そこでアタシは気づいた。この職員室に、多くの人が集まっているのを。

「6、7、8、9、10つと！」

『主催者：カール 終了/残り190枚/残り46名』

\*

【A棟2F 職員室/トワイラル 確認】

『主催者：ミユート 終了/残り16枚/残り6名』

ミユートが引き終え、残りは14枚と6名。引いてない人に俺も入っていた。

「お、俺はぜってえ死なねえよ！ こんな紙切れで死が決まってるか！」

男が紙を引いていく。引いた数は……5枚。

『主催者：サトラップ 終了/残り9枚/5名』

順番は、男性 女性 少年 男性 俺。下手すれば俺が死ぬかも知れない。ミユートが不安そうな顔で俺を見る。こんなゲームで殺

されてたまるかよ！

『主催者：ルター 終了/残り6枚/4名』

残り、6枚と4名か……

「さて、次は私の番か」

女性が紙を引く。2枚だけ。もっと引けよ！

メールが届いたがそんな事を気にせず、少なくなった紙の束を見続ける。額に汗が滲む。心臓がバクバクと激しく動く。

「つ、次は僕、か…… どうしよう……」

気弱そうな少年が泣きそうな顔で紙の束の前に立つ。5枚引けよ！ 頼むから！

俺がそう思っているとさっき、紙を引いた女性が俺に近づいてきて言った。それも耳元で、誰にも聞こえないように。

「助けて…… やろつか？」

「え？」

「あの少年が5枚引けば残り199枚。つまり、200枚目を引くのはお前の前の男になる。でも5枚以下なら男は1枚だけ引いてお前が死ぬ」

そんな事は分かっている！

「私に従うなら助けてやっても、いいぞ……？」

……クツ、命にはかえられない。俺は無言で頷いた。この時、俺

はほとんど何も考えずに首を縦に振っていた。……って、どうやって俺を助けてくれるんだ？ 再度引く事は不可能じゃないのか？

「ハプスブルク」、5枚引け」

女性が少年に向かってそう言った。……ハプスブルク？ 俺の中で数時間前の記憶が蘇る。『主催者：ミッション4\*ハプスブルク女の子の胸を揉む』

そのミッションは成功した。という事はハプスブルクは生きている。……そのハプスブルクはあの少年！？

「……………！ え、で、でも」

「やれ！ 早く引け！」

ビクリと体を震わせ、ハプスブルクは慌てて紙を引く。それを見ていた男が慌てて止めに入る。彼の次に紙を引く男が。

「お、オイ！ テメエ、何をしやが……………ッ！」

鈍い音と共に男が倒れる。ハプスブルクに命令した女性の手には椅子。その脚で彼の頭を思いつきり、殴りつけたのだ。

「つてえな！ ふざけんなよ！ このクソ女が……！」

男が女性に飛びかかる。彼女を押し倒し、長い金色の髪の毛を掴む。そして、拳を振り上げ、彼女の顔面を殴りつけようとした。その瞬間だった。全員の一斉にケータイが鳴ったのは。まさか……！

「なッ！？ ハプスブルクウ……！ テメエエ……！」

鬼のような形相で199枚目の紙を握っているハプスブルクを睨みつける。彼は怯えたような表情で後ずさる。男が女性から手を離し、立ち上る。その瞬間、ハプスブルクは逃げ出した。その後を追う男。再びケータイが鳴った。

「うわああ！」

「待て、このクソガキがアツ！！」

男はすぐにハプスブルクに追いつく。彼の頭を掴み、床に押し倒し、その首を絞める。アイツ、ハプスブルクを殺す気だ！

目をカツと見開き、首を絞める男。その表情には恐怖と憎しみが宿っていた。死への恐怖と死に導いたハプスブルクへの怒りが……

「や、めッ、苦し……」

首を締め上げ、彼を殺そうとする男。その男の頭部が突然、爆発した！ まるで爆弾が爆発するように。血が飛び散り、辺りは血の池と化す。激しい異臭がした。俺は無意識の内に手で顔を覆っていた。しばらくしてケータイを確認する。

『主催者：ハプスブルク 終了/残り1枚/残り2名』

『主催者：200枚目を引く者が決定した。ガズナに死を与える』

ガズナ…… さっき死んだ男の名前、か。その時、ケータイが鳴った。

『主催者：ガズナ 脱落』

これで3人目…… 3人目の死者が出てしまった。俺は眉をしかめさせながら、ケータイを閉じた。視界に入るのはおびただしい量



の赤い液体だった。そして、それを冷ややかに見つめるあの女性がいた。

ミッション8\*200枚目の死(後書き)

【現在情報】

逃走者：47名

脱落者：3名

## ミッション8\*殺戮のハジマリ

【A棟2F 職員室ノトワイラル 確認】

「なんで、俺を助けて、ガズナを殺すように仕向けたんだ！」

俺はあの女性に向かって怒鳴った。コイツのせいでハプスブルクは5枚引いてガズナが死んだ。それで俺は助かったのだが……

「別に。お前の方が使いやすそうだったから。それだけ」

「俺を……！」

「今、必要なのは協力、だ。協力しなければ、いずれ全員、死ぬ」

はあ？ いきなり何言ってるんだ？ コイツ。

「私の推測だと、逃走者が1人になるか、全員が死ぬまでこのゲームは続く」

「全員が、死ぬって逃走者は50人もいるんだぞ！ 全員が死ぬまでってどれだけミッションをするんだよ！」

「……気付いてないか？ ミッションは徐々にレベルが上がっている」

「…………！」

レベルが上がっている……！？

「ミッション1とミッション8。比べてみるといいだろう。どうだ？ 上がっていると思わないか？」

「くっ……！」

た、確かにそうかも知れない。ミッション1は簡単だし、誰も死なない。でもミッション8は誰かが必ず死ぬ。いや、下手したら全員が死んでいたかも知れない。

その時、職員室にいる全員のケータイが鳴った。そこで初めて気づいた。人の数がかなり減っている。いるのは俺と目の前の女性とミユート、ハプスブルク、プロイセンだった。他の人は面倒な事に巻き込まれない内にと去ったのか。

「このまま、レベルが上がれば死ぬ人数も増える。ミッション30くらいで全滅かもな」

「クツ……！ どうすりゃいいんだよ！ 主催者の下すミッションに従って延命するだけかよ！」

「協力して主催者を見つけ、殺すしかない」

そんな簡単に出来るワケねえだろ！

「協力しなければ全滅。もちろん、協力するよな？」

「……………」

コイツに協力するのは気が進まない。でも、彼女の言っている事は間違っていない。このままだと、ミッションによって全員が殺される。まだ、レベルが高くない内に、協力して主催者を倒すしかない。

「……………わかったよ。協力してやる」

「よし。私は“ブルボン”だ。よろしく」

彼女がそう言った時、また全員のケータイが鳴り響いた。ミッション9？ いや、さっきも鳴った。それがミッション9のメールだったら今回が成功メールか？

俺はケータイを開いて確認する。未読メールは全部で2通。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロアスター 死亡』

は？ 2通とも死亡メール！？ どうなってるんだ！？ 何でこの2人が死んだんだ！？ 自殺？ 他殺か！？

その時、職員室の扉が勢いよく開かれる。それと共に3人の逃走者が転がるように入ってきた。3人共、かなり焦ったような顔をしている。な、何があっただんだ！？

「や、やべえ！ ガチでやべえって！」

「扉、閉めるって！」

「わ、わかって……ッ！ う、うわぁッ！」

入ってきた男3人が扉から後ずさる。扉を開けて入ってきたのは……人、じゃない！ 入ってきたのは全身が真っ赤な、皮膚をひん剥いたようなデカイ男だった。いや、人じゃない。アレは怪物だ！ ボロボロになった上半身の衣服。着ている、というよりは纏まとっているだけだった。下半身の衣服は多少ボロボロにはなっていたが、まだ上半身に比べればマシだった。

片手にはボロボロになった血まみれの金属バット。その先端からは鮮血と思われる液体が滴り落ちていく。まさか……！ アゴラとゾロアスターを殺したのはコイツなのか！？

「な、なにっ！？ トワイラル！ どうなってるの！？」

ミュートが俺に抱き着いてくる。その体はガクガクと震えていた。俺に聞かれてもそんな事は分からない。むしろ、俺が聞きたかった。……アイツは何なんだ！

「くそっ！ これでも喰らえっ！」

さつき、入ってきた男が椅子を投げる。それは怪物の右肩に当たって落ちる。ダメージは全くない。それどころか怪物が椅子を投げた男の方を見た。

「ひっ、うわっ、わぁっ！」

椅子を投げた男が後ずさりする。怪物が男に向かって走り出す。片手にバットを握って。俺は目を背ける。聞こえてくるのは男の叫び声と何かを殴る音。何かが壊れ、折れる音　！

「今だ！ 全員、逃げるぞ！」

ブルボンの声。俺は抱き付いていたミュートの腕を掴み、勢いよく、わき目も振りかえらずに思いつきり走った。今、俺の心を支配しているのはまぎれもなく恐怖だけだった！ 純粹な恐怖しかなかった！

「う、わっ、がっ！」

職員室を出た所で別の男の声が耳に入る。俺はふと後ろを振り返る。頭を掴まれ床に押さえつけられた男。彼はさつき職員室に逃げてきた男の1人だ。恐怖と絶望に歪んだ顔。助けを求める顔。その顔にバットが振り下ろされた。

俺は目を背け、再び、全力で走り出した。ミュートの腕を掴んだまま、より遠くへ、より遠くへ走り続けた。道中、鳴るケータイを確認せずに……

\*

【A棟3F 廊下ノストイバー 確認】

まー、なんつーか。下が騒がしいな。ここの下って職員室だったよなー……。職員室で騒ぐと先生に怒られるよなー……。先生はいねえか。

でも、何の騒ぎなんだろ？ つーか、メールがさっきから立て続けに来るんですケド？ 溜らない内に確認しとくか。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロアスター 死亡』

『主催者：コルトバ 死亡』

『主催者：ウマイヤ 死亡』

ひいつ！ 全部、死亡メール！ 一気に4人も……。？ あわわ、ヤバいつて！ これで7人も死んでんじゃん！

私はその場に座り込む。ガクガクとして動けない。……。アレ？

下が静かになった。まさか、この4人は下の職員室で殺された……。？

その時、ドアを壊したような音がすぐ下から聞こえてきた。大きな人間が歩いた時に立てるような音も。……。階段を上っている……。？

私はチラリと周囲を見渡す。階段がある。4階と2階に通じる階段が。その階段から何かが上ってくる足音。

「はあ、はあ、はあッ……。！」

自分の息が荒くなる。心臓が今までにないほど、バクバクする。ミッショニーの時とは比べものにならないほど、バクバクする。全身からイヤな汗が流れ落ちる。

何かが来る！ は、早く逃げないと！ でも脚が動かない。まる

で自分の脚じゃないかのように。なんで？　なんで！？

やがて、すぐ近くで足音。その足音は4階へと上らず3階で止まった。息を殺す。少しでも音を立てたらこっちに来るかも知れない。しばらく止まっていたが再び動き出した。コツチに向かつて歩いて来た！　コツチに来たあつ！！

「ひっぐうっ……」

ガクガクと震える体。這はいつくばるようにして後ろに下がる。せめて、どこか近くの教室に……　でも、私が教室に入る前に足音の主は姿を現した。……　人間じゃなかった。怪物だった！

2メートル近くある巨大な皮膚を剥いたように赤い体。太く赤い腕。薄い黄色の爪。異様に鋭く、長かった。そして、衣服を纏わぬ上半身。その肩の後ろからはまだ小さい腕のようなもの。……　新たな腕が生えてきている？

「な、なに……？」

グロテスクな怪物が私にゆっくりと近づいてくる。その口からは血が滴り落ちる。殺されるッ！　助けてえッ！

怪物は太い右腕で私を押し倒す。冷たい爪が私の顔にかかる。

「ひいッ、いやあッ！！」

私は体を必死に動かして逃げようとする。でも怪物の力の前に私は何も出来なかった。ふと、視界に入った。左腕。その先端にある長い爪。それが私を目がけて突っ込んできたのを！



ミッション8\*殺戮のハジマリ(後書き)

【現在情報】

逃走者：42名

脱落者：8名

ストイバー

・ミッション1\*ストイバー 酔っぱらいのマネをする

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5823x/>

---

逃走中 ルイン・エスケープ

2011年11月17日21時49分発行